

どんな運命も受け入れよう 1051



悲しくなるような運命に、心が弱くなってしまいます。
運命だから、しかたがないことなのですが、いつまでもクヨクヨしても、しかたありません。

**病気により、生まれつき手足が、無かった乙武洋匡（おとたけ ひろただ）さん。
彼が小学5年生の時、同級生の女の子と「漢字チャンピオン」をめぐって、ケンカをした時の会話です。**

女の子「私はオト（乙武洋匡）になんか、何だって勝てるんだから」
乙武「いや、僕には誰にも負けないものが、ひとつある」
女の子「何、それ？ 勉強だったら、私も負けないわよ」
乙武「ううん、そんなことじゃない」
女の子「じゃあ、何？」

さて乙武さんが、「自分が誰にも負けないもの」として、挙げたことは、何だったでしょうか？

「ボクには、手と足がないこと！」
「手足がないから、ボクなんだ」

彼は、手足がなくても、決して落ち込まず、普通の学校に、進学しました。
そして、勉強だけでなく、スポーツも友だちと一緒に、アクティブに楽しんで、過ごしたのです。

「クヨクヨする」などという言葉は、彼の辞書には、存在しなかったのでしょう。
やがて、大学生になった彼は、「せっかくもらった障害を、生かし切れていないのは、宝の持ち腐れ」と考えて、障害者たちの助けとなる、地域活動に携わっていくのです。

彼のように、どんな運命でも、ポジティブに受け入れましょう。
たとえ悲しくなるような運命でも、前向きに考えると、生きる強さに、変えることができるのです。

**どんな運命でも、あなたにしかない運命なのです。
どんな運命も受け入れて、前を向いて、明るい生きたいものです。**



運命の女神が微笑む人 1052



いいチャンスに出会い、チャンスを手にしたい、と願います。
では、どんな人に、運命の女神が、微笑むのでしょうか。

芝居の舞台や歌舞伎の公演で、主役が倒れた時に、無名の新人が、抜擢された記事を読んで、あなたは、どう思いますか？

「へえ、いきなり主役の代わりなんて、よっぽどすごい新人なんだ」と思うでしょうか？
その考えは、半分だけ当たりです。

では、もう半分の理由は、何か？

その人が代役に選ばれるのには、その人でなければ、ダメな理由が、ちゃんとあるのです。
多くの場合、その最大の条件となる共通の理由とは、いったい何でしょうか？

その新人だけが、主役のセリフを、全部覚えていたから。

その新人は、いつかはこんなことがあるのでは？と、いつもいつも主役のセリフまで、覚えていたのです。

いや、主役だけでは、ありません。

異性や年齢が離れた、キャストの代役は無理でも、自分が代役をつとめられそうな出演者については、その全員のセリフを、毎回毎回、全部覚え続けていたのです。

いつ誰が、急に出演できなくなっても、「あっ、○○さんのセリフなら、全部覚えています！」と、手を挙げられるように、準備を怠らなかつた・・・。

気が遠くなるような努力です。

幸運の女神は、ちゃんと努力している人を、見ていて。

そして、「あの子、頑張っているみたいだから、そろそろ微笑んで、あげようかしら・・・」
なんて、思ってくれなのです。

その新人が、大抜擢を受けたのは、偶然ではなく、必然なのです。

それだけの準備ができる人は、ちゃんと役者としての鍛錬も、怠っていないから、それなりの実力を、身につけています。

だから、「よっぽどすごい新人なんだ」という見方も、半分当たりなのです。

小柴昌俊（ノーベル物理学賞受賞者）は、「運を捕まえられるかどうかは、日頃から準備をしているかどうかだ」の名言を、残しています。

いつでも受け入れ態勢が、できていないと、運は目の前を、スッと去ってしまいます。

リンカーン（アメリカの大統領）は、「6時間で木を切り倒せ、と言われたら、私は最初の4時間は、斧を研ぐことに、使いたい」の名言を、残しています。

政治家になる前のリンカーンの仕事は、木こりでした。

どんな時も、どんなことでも、自分も常に準備をしましょう。

誠実に準備をすれば、それが自分の力となり、運命の女神が、微笑んでくれるのです。

あなたの日頃の準備への努力の継続が、あなたにチャンスを、もたらすのです。

なりたい肩書きを名乗ろう 1053



「自分がなりたい人」に、簡単になる方法を、知っていますか。
それは、「自分の肩書き」を決めて、名乗つてしまうことです。

例えば、あなたがオナラについて詳しくて、「オナラ評論家」になりたければ、名刺に「オナラ評論家 尻間ブー太郎」と、書いてしまえばいいのです。
その瞬間から、あなたは立派な「オナラ評論家」になれます。
堂々とその名刺を、人に渡せばいいのです。

美味しい料理だけでなく、自ら料理の道具も考案してしまう、元気な平野レミさん。
さて、彼女が自ら名乗る、その肩書きが、何だったでしょう？

料理関係の専門家で、「料理研究家」「料理家」と名乗る人がいます。
平野レミさんは、どちらでもありません。

「料理愛好家」なのです。

料理を研究するのではなく、「愛好」していたのです。
いつ見ても、とっても楽しそうなわけです。
この「料理愛好家」という肩書きは、彼女の「料理を楽しんじゃおう」という姿勢が、出
ていて、なかなかイイです。

「好きこそモノの上手なれ」ということでしょう。
「愛好家」って、素晴らしい・・・。
楽しんでいる人が、1番強いということですね。

ちなみに「しあわせ塾」の私の肩書きは、「しあわせ塾塾長（しあわせアドバイザー）」な
のです。
しあわせ塾のホームページやブログなどを通して、多くの人に、しあわせのおすそ分けを
したいと願って、つけたのです。
少しずつ肩書きのように、しあわせの輪が、広がってきてるので、嬉しく思っています。

あなたも、自分だけの肩書きを、考えてみては、いかがですか。
名乗るだけで、肩書き通りの人物になれるなんて、簡単だし、ステキじゃありませんか。

肩書きの達成に向けて、あなたのすべての才能と努力が、開花していくのです。
そして、あなたが何をしたいかを、周りに知らせると、多くの人が、あなたを応援してくれ
れるようになるのです。

間違いや偶然も大事な発見 1054



いろいろな出来事で、役に立たないことは、ありません。
「間違い」や「偶然」が、発見や発明につながった例は、数えきれません。

付箋紙が、強力な接着剤を作ろう、としていた時の失敗作から、生まれたという話は、有名な話です。
吸い取り紙は、製紙会社の職人が、間違って「ものすごくじむ紙」を、作ってしまったのが、発明の「きっかけ」です。

万年筆は、品質の悪い万年筆から、契約書にインクが垂れたために、商談をキャンセルされた事に、腹を立てた人が、改良を重ねて飛躍的に品質が、向上したそうです。

消しゴムは、偶然、鉛筆で書いた文字を、生ゴムの固まりでこすったら、よく消えた事から改良されたものです。
ついでに「消しゴム付き鉛筆」は、小さくなつた消しゴムが、すぐどこかに行ってしまう事に、困った貧乏画家が、発見したものです。

電子レンジは、軍事機器メーカーで、レーダー技術を改善する研究中に、偶然、技師がポケットに入っていたチョコレートが、ドロドロに溶けた事が、発明につながりました。
「清酒」は、造り酒屋をクビになった男が、腹いせにお酒をダメにしてやろうとして、酒樽に木炭を入れた事から、生まれました。

ビスケットは、一説によれば、スペインのビスケー湾に難破した、船の船員たちが、海水につかってしまった、小麦粉やバター、砂糖を、こねて焼いてみたら、美味しかったのが発祥です。

「間違い」や「偶然」が、新たな発見や発明のチャンスを、与えてくれたのです。
そのチャンスに気づき、改良を継続したのです。

ポイントは、「あー、失敗しちゃった～」で、終わらせない事です。
間違い・偶然として、無視しない事が、大切です。

「間違い」や「偶然」にも、大事な発見があるのです。



時には積極的に逃げよう 1055



子どもの頃、ケンカして逃げるときに、「三十六計、逃げるにしかず！」と言って、その場から、逃げた人もいるかもしれません。

この「三十六計」とは、中国の兵法書、『兵法三十六計』のことです。
そして、この「逃げる」という戦術は、この兵法書の「最期の手」として、書かれています。

簡単にいえば、「もう勝てないと思ったら、ただちに逃げるがよい」ということです。
そのほうが、兵を無駄死にさせず、被害を最小限に、抑えることができます。
その時は逃げても、「戦力を温存し、次の戦いで、逆転勝利すればいい」と考えるわけです。

これは、現代のビジネスなどの世界にも、通じる戦術でしょう。

勢いのある企業は、赤字店をいつまでも、引きずりません。
驚くくらいあつという間に、閉店させます。

「あの店は、ただの実験だった」というくらいの引き際のよさです。
伸びる会社も、成功する人も、パッと撤退して、次の手に打って出るのです。

例えば今、理不尽な環境の中に、置かれている方が、いらっしゃるなら、逃げるという選択肢を、考えてみることは、大事なことです。
それは、人生で最終的に、勝利を得るための『積極的な逃走』なのです。

「逃げる」ことは、恥でもなんでもなく、勝利を得るための立派な作戦なのです。
はからずも「理不尽な環境」に、おちてしまったら、ヘタに解決しようとしないで、逃げるのが一番賢いのです。

だって、何しろ「理不尽」なんですから、理屈は通用しません。
一度、逃げ出して、リセットすればいいんです。

時には積極的に、逃げましょう。
じつと時を待てば、必ず次のチャンスが、巡ってくるのです。



幸せは気づくもの 1056



幸せを手に入れるには、どうしたらいいのでしょうか。
そのためのヒントを、紹介します。

「幸せは、○○○もの」
この○○○の部分に、どんな3文字が、入ると思いますか？

えっ？ 「幸せは、探すもの」ですって？
素晴らしい！ あなたは、とてもアクティブな方です。

えっ？ 「幸せは、つかむもの」ですって？
力強いですね。
あなたは、起業家のように、とてもバイタリティがある方です。

アクティブだったり、バイタリティがあつたりする人にとっては、幸せは「探すもの」でも「つかむもの」でも、正解だと思います。
でも、そんな元気がない人にとっては、いくら探しても、いくらつかもうと思っても、なかなか思い通りに、手に入らないのが幸せです。

でも、実はどんな人でも、1秒で幸せを、手に入れる方法があります。
最初の質問、「幸せは、○○○もの」の「○○○」の中に入る答え。
それは、・・・。

「幸せは、気づくもの」

子育てを問われたとき、前皇后陛下の美智子様は、こんなふうにおっしゃいました。
「『幸せな子』を育てるのではなく、どんな境遇におかれても『幸せになれる子』を、育てたい」

このお言葉の真意は、「どんな境遇におかれても、幸せを感じられる子」「どんな境遇におかれても、幸せを見つけられる子」なのではないかと思います。

人って、「すぐそばにある幸せ」に、気がつかないものです。
幸せは、あなたの周りに、たくさんあるのです。

遠慮なく、多くの幸せに気づき、ますます幸せに、なっていきましょう。
いつもフッと幸せに、気づくことができる自分で、ありたいものです。

どんなことにも「幸せ」とつけよう 1057



たくさんの幸せに気づいて、幸せになります。
ここでは、幸せに気づくための簡単な方法を、紹介します。

ある女性が、自分のSNSに、こんなひと言を、書き込みしていました。

おはようございます！
朝、顔を拭いたタオルが
猫の毛だらけの幸せ

3行目の途中、「猫の毛だらけ」まで読んだ瞬間、当然、最後の部分は「～毛だらけでまいりました」とか「～毛だらけで最悪！」なんて言葉で、終わると思いました。

ところが、「猫の毛だらけの幸せ」という結び。
顔を拭いたタオルが、猫の毛だらけで、幸せって・・・。

あっ、そうか！
最後に、強引に「幸せ」ってつけると、たいがいのことは「幸せ」になってしまふんだ！
何気ない1文なのに、私は妙に、感動してしまったのです。

☆仕事が忙しいという、幸せ
☆子どもが、言うことを聞かないという、幸せ
☆なかなか物事が、うまくいかないという、幸せ
☆お腹が、空いてしまったという、幸せ
☆幸せを、夢見て過ごせるという、幸せ

う～む。
なんでもいけそうです。

こんなに簡単な「幸せ製造法」が、あったとは・・・。
自分が、感じたこと、思ったことの最後に、「幸せ」をつけるだけで、いいのです。

そうすれば、良いこと悪いことなど関係なく、すべて幸せに、なれるのです。
どんなことにも「幸せ」とつけ、たくさんの幸せに、気づきましょう。

お母さんが家事に感謝 1058



多くのお母さんが、毎日の家事を、頑張っています。
夫や子どもなど、家族のために、せっせと努力を、継続しているのです。

家事とは、大切なことなのですが、忙しすぎて、ついついイライラしがちになります。
そんな時は、感謝の気持ちを大切にして、家事をすると、楽しくなるかもしれません。

ここで、あるお母さんが、毎日感謝していることを、紹介します。

「お母さんが感謝している10のこと」

- 1 朝早く起こされる → 愛する子どもがいるということ
- 2 家の掃除 → 住む家があるということ
- 3 洗濯 → 着る服があるということ
- 4 皿洗い → 食べるものがあるということ
- 5 食卓の下の食べこぼし → 家族で食事ができるということ
- 6 買い物 → 生活費があるということ
- 7 トイレ掃除 → 下水道が完備しているということ
- 8 家の中の騒音 → 私の人生に人がいるということ
- 9 宿題の手伝い → 子どもが学んで成長しているということ
- 10 寝床に入るときのだるさと疲れ → 私は今日も生きている！

家事の1つひとつに、その意義を感じ、心を込めて、感謝しているのです。
考え方を少し変えるだけで、イライラがなくなり、気持ちが、明るくなってきます。

大変な家の1つひとつに、「感謝」することで、うまく「幸せ」に、変換できるのです。
どんな家事でも、感謝できるお母さんが、最高に幸せなのです。



未来を諦めない 1059



「時間がないから」「お金がないから」「もう年だから」など、できない言い訳を考えるのは、1番簡単です。

言い訳ばかりしていても、何も始まりません。

努力は何もしないで、未来を諦めているのです。

あなた自身が、輝かしい未来を追い求めれば、良い結果が得られるのです。

ある商社マンが、3か月後の海外赴任の辞令を受け、奥さんと幼い子どもたちを、海外へ連れて行くことにしました。

でも、70歳のおばあちゃんだけは、英語しか通じない、慣れない土地での生活は、ムリだろうと、日本に残ってもらうことにしたのです。

それを聞いた、おばあちゃんは、大ショック。

なぜなら可愛い孫に、会えなくなってしまうからです。

そこで、このおばあちゃん。

ある行動に出ます・・・。

70歳のおばあちゃんが、孫と別れたくない一心で、とった行動とは、何だったのでしようか？

なんと、英会話教室に通って、3か月で、英語の日常会話を、マスターしてしまったのです。

この70歳のおばあちゃんは、「もしかしたら、2度と孫に会えなくなる」というピンチを迎えた時に、まず諦めなかつた点が、素晴らしい。

そして、もっと素晴らしいのが、「自分が英語を、しゃべれるようになる」という、難易度の高い目標に挑戦し、見事に達成したのです。

おばあちゃん、ものすごい集中力です！

このおばあちゃん、「何のために学ぶのか」が明確だと、「集中力が違う」ということを、証明してくれました。

未来を諦めない努力によって、おばあちゃんは、大好きな孫と別れずに、済んだのです。

「学ぶこと」に、定年は、ないのです。

未来は、諦めなければ、変えられるのです。



相手の気持ちを察して行動しよう

1060



ある老舗旅館の女将さんは、お客様と接する時、いつも元気に、挨拶をしていました。でも、ある時、1人のお客様から「そんなに明るい声で、笑いかけられても、悲しくなる。今、とても気持ちが、沈んでいるからね」という意味のことを言われて、ハッとします。

それ以来、「お客様が今、どういう気持ちで、いらっしゃるのか」を推し測って、挨拶のトーンを、変えるようにしているのだそうです。

常にお客様の気持ちに、合わせた行動を、しているのです。

帝国ホテルのあるドアマンは、常連客約1000人の顔と名前、そして乗っている車の車種や運転手まで、覚えているそうです。

だから、「○○様、いらっしゃいませ」と言って、車のドアを、開けることができる。

帝国ホテルにある、バーのバーテンダーは、注文があると、1杯目のグラスは、お客様が最も手に取りやすい右斜め前に、置くのだそうです。

おかわりの注文が来た時に、2杯目のグラスを置く場所は、いったいどこでしょう。

お客様が、自分で移動した、1杯目のグラスの位置に、置くのです。

誰でもそうですが、バーやカフェで、飲み物を置く場合、自分がもっとも飲みやすい場所、あるいは、グラスを置いておきたい場所に、グラスを置きます。

神経質な人は、それこそミリ単位で、グラスの位置を、調整したりするものです。

バーテンダーは、お客様が1杯目のグラスを、どこに置いていたかを、さりげなく観察しておいて、2杯目のグラスは「当たり前のように」その位置に、置くのです。

それがあまりにも、自然に行われているので、多くのお客様は、そんな配慮に、気づきもない。

でも、「あのバーは、なぜか居心地がいい」ということになる、というわけです。

バーテンダーのように、相手の気持ちを察するには、お客様の今の状況を、察する観察力と好みを覚える記憶力が、必要です。

このような一流のサービスは、1朝1夕にできるものではありません。

あなたなりに、ちょっとした工夫をすることで、人の心をとらえることは、できるでしょう。

相手の気持ちを察して、相手が心地よくなるように、常に行動しましょう。

恵みの雨に感謝感謝 1061



最近は温暖化の影響で、急な大雨が、降ることがあります。
大雨が降ると、洪水・土砂災害・堤防決壊・床上浸水など、多くの災害が起こります。
雨に対する不安感が高まり、雨を嫌う人が、多くなっているように感じます。
どうしようもない自然現象なので、本当は雨が、悪いわけではないと思います。
日頃から急な大雨に対する対策が、必要であり、人々の努力と工夫によって、被害が少なくなるのでは、ないでしょうか。

なんと言っても、人々にとって、雨はなくては、ならないものなのです。
雨のおかげで、幸せに暮らしていけるのです。

ここで、学びの一歩（令和童蒙読本）の「雨の大きな恵み」を、紹介します。

ある日、雨が降った。
子どもは、「どうしてこんなに、雨が降るんだろう。これでは外で遊ぶことが、できない。」と嘆いた。
父が、「お前はどうして、嘆いているんだい。お腹でも空いたのかい。」と尋ねた。
子どもは、「そうではありません。父上の言うとおり、食べられなければ、嘆くこともありますが、毎日飽きるほど、食べています。嘆いたりしません。」と答えると、父は、「それなら、庭にきれいな花が咲くのを見て、嘆いているのか。」と尋ねた。
子どもは、「父上もご存じですが、私はとても花が、好きです。そんなことで、嘆いたりはしません。」と笑って言った。
父が、「もし一滴の水もなかったら、花は咲くと思うかい。」と尋ねると、子どもは、「もし太陽に照らされて、乾いてしまったら、一つの花も咲くことは、できないでしょう。」と答えた。
父は、「毎日食べているご飯は、何から作られていると思うか。」と尋ねると、子どもは、「それは稻からです。」と答えた。
父は、「稻は水を与えるなくても、成長するだろうか。」と尋ねると、子どもは「水を与えるければ、成長することはできません。」と答えた。

この時父が、雨を指差して、「稻を成長させるのも雨で、花を咲かせるのも雨だ。全てのものに、潤いを与えるのもまた雨だ。つまり雨というものは、私たちに大きな恵みを、与えてくれるものだ。お前がどうして、嘆くことがあろうか。」と言った。

子どもは、「今、父上の教えを受け、初めて雨の大きな恵みが、分かりました。」と大いに納得した。

子どもは、雨の素晴らしさに、気づいていなかったのです。
父の教えて、雨が自然や人々に、大きな恵みを与えていることが、分かったのです。
人は、雨が降った水を飲み、生きていくことが、できるのです。
雨の恵みに、感謝感謝で、いっぱいなのです。

まだまだ未熟 1062



人は、何事にも慣れてくると、ついつい自分はできる、と過信してしまう傾向にあります。少しやっただけなのに、謙虚さを感じなくなり、傲慢になってしまふのです。

そうなれば人は、日ごとの真摯な努力を、継続できなくなります。人としての成長が、ストップしてしまうのです。

あるカメラマンが、新潟で50年間も、お米を作り続けている、農家のところへ、取材に行った時のことです。
写真を撮り終えて、最後に、何気なく「今年のお米の出来は、どうですか？」と聞いたのだそうです。

それに対する農家の返事が、実にカッコいいのです。
きっとこの人は、感じるままに、答えたのでしょうか、人生の教訓になるような、一言だったのです。

「いや、わかりません」
「僕は、まだ米を、50回しか、つくったことがない、ですから」

この言葉は、まさに「実るほど 頭を垂れる 稲穂かな」です。
天狗にならないにも、ほどがあります。

1年に1回しか、作ることが、できないお米。
そのお米を、毎年毎年、まるで「初めてお米を、作った年のように」ひたむきに、真面目に、丹精込めて、作っている姿勢が、伝わってきます。

10年やそこらの経験で、仕事の全部が、わかったような顔を、してはいけませんね。
どんな仕事も、奥は深い、いくらでも追求できます。

「こんな仕事、クリエイティブじゃなく、つまらない」「俺は、こんなところで、くすぶつている、器じゃない」などと、偉そうに言う前に、今、取り組んでいる仕事の深掘りを、しましよう。
意外な奥の深さに気づき、今まで、楽しくもなんともなった仕事が、がぜん面白く、なるかもしれません。

「まだまだ未熟」と、現状の自分に、満足しない謙虚さが、仕事をさらに、追求する姿勢につながります。
それが成長として、わが身に、跳ね返ってくるのです。

落ち込んでいる人に優しさを 1063



何か失敗やトラブルがあり、心が落ち込んでいる人がいたら、あなたはどうしますか。落ち込んでいる人に、優しく接することが大切だ、と思っている人が、多いと思います。しかし、実際に落ち込んでいる人に、出会った時に、本当に優しく、できるでしょうか。

天才ギャグ漫画家、赤塚不二夫のエピソードです。

『天才バカボン』を、描き上げた赤塚不二夫、締め切り前に編集者に、原稿を渡します。しかし、その後大事件が・・・。

「原稿をタクシーに、置き忘れて、なくしてしまいました！」と、編集者が蒼白で、戻ってきたのです。

タクシーとは、連絡がつきません。

しかし、翌日には原稿を印刷所に、渡す必要があります。

まさに大ピンチ！

しかし、赤塚不二夫は、まったく怒ることなく、「ネーム（脚本のようなもの）があるから、また描ける」と言い、さらに・・・。

「まだ少し時間がある。飲みに行こう」

こう言ったのです。

これはもちろん、落ち込んでいる編集者を、気遣っての言葉です。

飲んで戻った赤塚は、また数時間かけて、同じ話を描き上げて、「2度目だから、もっとうまく描けたよ」と言って、その原稿を編集者へ、渡したそうです。

紛失した原稿は、1週間後にタクシー会社から、赤塚不二夫宛てに、郵送されてきました。

「2度と同じ失敗を、繰り返さないように、お前が持つてろ」と、赤塚不二夫からその原稿を、プレゼントされた編集者は、その後35年間も、自分への戒めとして、持ち続けたそうです。

そして、赤塚不二夫が、亡くなった時、「この原稿の役目を終わった」と、娘さんに原稿を戻したのです。

だから、現在「天才バカボン」の同じ回の原稿が、2つ存在するのだそうです。

ファンからも出版関係者からも愛された、彼の葬儀の参列者は、1200人に及びました。本当の優しさを、持った赤塚不二夫が、いかに慕われていたかが、わかります。

完璧な仕事や勝ち負けに、こだわっていると、誰かが失敗して、落ち込んでいる時に、ついそれを、責めてしまうものです。

でも人間、完璧な人なんて、いないですから、誰でもミスを犯します。

本当の優しい人とは、誰かが失敗した時やトラブルが起きた際にも、周囲を気遣うことが、できる人なのです。

落ち込んでいる人にこそ、人の優しさが、必要なのです。

お米には命が宿る 1064



毎日の食生活に、なくてはならない物は、何でしょう。
それは、毎日食べる活力の源である、お米です。
農家の人々が、丹精込めて育てた、お米を食べることで、人は健康な身体を、保っています。
お米に対しては、感謝の気持ちで、いっぱいなのです。

ここで、熊本日々新聞掲載、20代女性の「作り手が命を吹き込むお米」を、紹介します。

「米粒残しちゃだめよ」。
子どもの頃、そう言われて、育った大人が、どれくらいいるだろう。
しつけのためか、もったいないからか、親たちがどのような理由で、言っているのか不明だが、なぜか私は、茶碗に残った米粒を見ると、強烈な罪悪感と恐怖心のようなものが、ズキンと胸を刺してくる。
逆にきれいに炊き上がったお米は、きらきらと輝いて見え、ふわっと温かい風が、胸を吹き抜ける。
「お米には、目に見えない力がある」。
私は本気で、そう思っている。

先日母の実家の米作りを、手伝った。
無農薬のため、合鴨農法で、育てている。
鴨を狙う野生動物への対策も欠かせなく、30度近い猛暑の中、家族総出で1日中、網張りをした。
米作りには88の手間が、かかると言われるが、私はこの1日でも、クタクタになり、米作りの大変さを、痛感した。

その夜、祖母が、お米を研ぎながら、つぶやいた。
「お米には、1粒1粒命があって、稻は毎日一緒に生きてきた、兄弟だけん、1粒でも残したら、かわいそうやろ」

お米1粒1粒を命と考え、自分の子どものように、愛情を注いで、作っているのだ。
なるほど、こうやって作り手によって、お米に命が、吹き込まれていくのか。
だからお米には、心に訴えかけてくるような、不思議な力が、あるのかもしれない。

米粒を残さず、食べることは、愛情いっぱいに育てられた、1粒1粒の命を、大切にすること。
どんなに時代が、変化しても、お米にこの力がある限り、いつまでも「米粒を残しちゃいけない」と、伝え続けられるだろう。

お米には、農家の人々の愛情と命が、宿っているのです。
お米に感謝の気持ちを、持ち続け、大切にしていきたいものです。

助け合いの精神で上手くいく 1065



人は、自分1人の力だけで、生きているのではありません。
人は、多くの人から、助けられながら、生きているのです。

個々人だけの力では、どうにもできないことが、多くあります。
そんな時は、助け合いの精神が、大きな力を、発揮するのです。

マグロ船の仕事は、非常にハードです。
遠洋の漁場に着いたら、1日17時間の肉体労働が、20日間続くことも・・・。
1人でも多く人手が、欲しいところですが、船長はこの漁に、参加しません。
「偉いから」では、ありません。

実は、もっと重要な任務が、あるのです。
マグロ船の船長が、ほぼ1日中たずさわっている、ある大切な役割とは、どんな仕事でしょう？

船長は、無線で、他のマグロ船に連絡して、マグロの群れがいる場所の情報交換を、おこなっているのです。

あなたは今、「えっ、他のマグロ船が、マグロの群れの場所を、教えてくれるの？」って、思いましたね。
意外にも、これが教えてくれるのだそうです。

実は、マグロ船同士は、こうした漁場の情報を、惜しげもなく、頻繁に交換し合うのです。
海に出たら「持ちつ持たれつ」で、助け合うのが、当たり前なのです。

日本の1部の集落には、「結（ゆい）」と呼ばれる、共同作業があります。
有名なのは、合掌造りの茅葺き屋根の集落で知られる、岐阜県白川郷の結が、あります。

茅葺き屋根のふき替えには、莫大な費用と労働力が、必要ですが、これらを集落の助け合いである、結により無報酬で行うことで、村人個人の手間と費用が、軽減されてきたそうです。

人は、どんなに強い人でも、頭のいい人でも、1人では、生きていけません。
ましてやマグロ船のように、大海原など自然に挑む時、人は無力です。

だから助け合いが、必要なのです。
あなたも、困った時には、大いに人に、頼って下さい。

「うばい合えば足らぬ わけ合えばあまる」のです。
助け合いの精神で、なんでも、上手くいくのです。

未来に希望を持とう 1066



未来の希望は、生きる勇気と力強いエネルギーを、人に与えてくれます。
辛く苦しい日があっても、常に前向きに、未来の希望を持ち続けて、生きましょう。

国民的ベストセラー『窓ぎわのトットちゃん』。
トットちゃんこと、黒柳徹子さんが、子どもの頃に通っていた、トモ工学園での体験を綴った小説です。

終戦の直前まで、現在の自由が丘にあった、トモ工学園は、教育者の小林宗作が、校長となり、自由奔放な教育を、展開した学校でした。

小林校長が、すべてを捧げて創り上げた、理想の学校のトモ工学園は、この物語の最後に、B29からの焼夷弾で、焼けてしまいます。
燃え上がる校舎を、じーっと見ていた小林校長は、そばに立っている大学生に、声をかけます。

炎に包まれる学校を見ながら、小林校長が、息子に言った言葉は、何だったでしょう？

「おい、今度は、どんな学校、作ろうか？」

「本当に前向きな人は」文字通り、前（＝未来）しか見ていません。
だから何を失っても、ゆるがないのです。
どんなピンチでも、それを「新たなチャンス」と、考えることが、できるのです。

燃え落ちる、校舎を前にして、新たなスタートに、胸をワクワクさせていた、小林校長です。
その心境に達するのは、容易ではありませんが、ぜひ見習いたいものです。

明るい未来の希望が、あなたを、明るい未来の世界に、導いてくれるのです。



誰にでも才能がある 1067



走るのが、速い人がいます。

その人と比べて、自分は才能がない、と言う人がいます。

数学が、得意な人がいます。

その人と比べて、自分は才能がない、と言う人がいます。

その道で優秀な人と比べて、才能がないのは、しかたのないことです。

比べることが、意味がないようにも思います。

しかし、才能がないと言う人は、本当に才能が、ないのでしょうか。

フランスの哲学者・政治思想家のモンtesキーは、次の名言を残しています。

才能とは、神から与えられ、それとは知らずに、私たちが持っているものだ。

この名言は、「すべての人は、自分では知らなくても、神から与えられた、才能を持っている」と教えています。

江戸時代の思想家、伊藤仁斎（じんさい）は、「人はそれぞれ、その人ならではの才能を持っている。たとえば私には、諸葛孔明（しょかつこうめい 中国の天才的な軍師）の才能はない。しかし、私には、諸葛孔明が持っていない、才能を持っている」と述べています。

つまり、相手の才能には、かなわないと思った時は、自分が持っている、別の才能で勝負をすればいい、ということを、教えています。

誰でも他の人が、持っていない才能を、持っているのです。

☆行動力がある

☆人と話すのが、好きだ

☆駅の名前を、覚えるのが楽しい

☆美味しい料理を、作るのが得意だ

☆面白い文章を、書くのは好きだ

人は、このようないろいろな才能を、持っているのです。

ライバルの才能が、優れているからと、落ち込む必要はありません。

あなたには、神から与えられた、素晴らしい才能があるのです。

自分の素晴らしい才能に、自信を持って、生きましょう。

幸せはいっぱいあふれている 1068



毎日幸せを、感じている人がいます。

そんな人は、やる気とプラスのエネルギーがいっぱい、毎日が充実しています。

どんなことを幸せと感じるか、人それぞれ違いがある、と思います。
日常の生活の中には、たくさんの幸せが、あるのです。

ここで、熊本日々新聞掲載、女子中学生の「私が幸せだと感じる瞬間」を、紹介します。

私が幸せを感じる瞬間は、2つあります。

1つめは、「天草の景色を眺めるとき」です。

特に夕日を眺めているときは、時間を忘れて、落ち着くことができます。
学校も再開し、受験勉強で慌ただしい日々の中、ふと夕日を見ると、その一瞬はきついことも忘れて、幸せな気分になれます。

幸せを感じる瞬間の2つめは、「おいしい物を食べるとき」です。

私は、母の作るオムライスが、大好きです。

偶然にも中学1年生の妹も、好きな食べ物は、オムライスと学級で紹介していたようで、毎日の晩ご飯のメニューの中から、好きな物がかぶったことに、笑ってしまいました。

私は、このような日常生活で得られる、幸せな瞬間のおかげで、毎日頑張ることができます。

「幸せ」というものは、私たちの生活に、あふれていることに、改めて気づくことができました。

今、新型コロナウイルスで大変だからこそ、小さな幸せを見つけて、1日1日を頑張っていけば、きっとこの状況を、乗り越えることが、できると思います。

幸せを感じる瞬間があることは、素晴らしい幸せなことです。

幸せは、気づこうとすれば、たくさんの幸せに、気づくことができるのです。

幸せは、いっぱいあふれていることに、感謝をして、幸せの瞬間を、心地よく過ごしましょう。



済んだことを気にしない 1069



過去の嫌だったことを忘れずに、いつまでも気にしている人がいます。
そんな人は、毎日気持ちが晴れずに、忘れるまでに時間がかかります。
それとは逆に、すぐに忘れてしまい、クヨクヨしない人がいます。
そんな人は、気持ちの切り替えが上手く、毎日気持ちが晴々として、過ごすことができます。

松下幸之助（旧社名松下電器産業を、一代で築き上げた経営者）のエピソードを、紹介します。

ある日のこと、船を下りて波止場を歩いていた、幸之助さん。
いきなりやってきた大男に、身体をぶつけられて、海に落ちてしまいます。
急いでいるのか、気が付かないのか、そのまま行ってしまう大男。
ずぶ濡れになって、海からあがった幸之助さん。
別に怒る様子もなく、「ああ、夏でよかった」なんて、のんきな事を言っている。
怒りがおさまらないのは、一緒にいた秘書です。

「社長、大丈夫ですか。さっきの男、私が追いかけて、文句を言っています」と、息巻きます。

この秘書に対して、幸之助さんは、キッパリとこう言ったのです。

「馬鹿者！ 今から文句を言ったからといって、私は海に落ちないで済むのか。海に落ちないで済むなら、いくらでも文句を言いに行く。だが、そんな事はあり得ない。今さら文句を言ったところで、私が海に落ちたという事実は、何もかわらないじゃないか！ 先を急ぐぞ」

そう言うと、濡れたスーツを手で払い、さっさと歩き出したそうです。

すでに起こってしまった事は、とやかく文句を言っても、変えることはできません。

ならば、気にせず、次に向かった方が良い。

実に潔（いさぎよ）い考え方です。

ここで、松下幸之助さんの名言（道）を、紹介します。

自分には
自分に与えられた道がある
広い時もある
せまい時もある
のぼりもあれば くだりもある
思案にあまる時もある

しかし 心を定め
希望をもって歩むならば
必ず道はひらけてくる
深い喜びも
そこから生まれてくる

常に希望を持って、自分の道を、開いていきましょう。
後ろを気にせず、前を向いて、進むだけです。

人の過失を笑って許そう 1070



人の過失を、いつまでも許すことが、できない人がいます。
この場合は、過失をした人、許すことができない人、2人とも不幸が続きます。

反対に、人の過失を、気軽に許すことが、できる人がいます。
この場合は、過失をした人、許すことができる人、2人とも幸せが続きます。

かつての会津（あいづ）の殿様、加藤嘉明（よしあきら）のエピソードです。

若き日の嘉明公は、「手塩皿（てしおざら）」という、10枚1組のお皿を家宝にし、大切な客をもてなす時に使うなど、それはそれは、大切にしていました。
ところがある日。
このお皿のうちの1枚を、側近の若者が、不注意から割ってしまったのです。

こういうものは、全部そろっていてこそ、価値があるもの。
この家臣は、「これは打ち首に、なってもおかしくない」と、覚悟を決めます。
10枚1組のお皿のうち、1枚を家臣が、割ってしまったと知った嘉明公は、意外な行動に出たのです。
あなたには、嘉明公が、何をしたかわかりますか？

なんと、嘉明公。
残った9枚の皿も、その家臣の目の前で、全部割ってしまったのです。

別に、ヤケを起こしたわけでも、気がフレたわけでもありません。
残りのお皿まで割った理由は、次のようなものでした。

「残りの皿を、そのままにしていたら、この皿が使われるたびに、おまえはその内の1枚を自分が、割ってしまった事を思い出し、周りもおまえを白い目で、見てしまうだろう。
ならば、いっそ、すべて無くしておいた方が良い」

そう言って、笑って許した、というのです。

名君ですね。
人の上に立つ人は、これくらいの器の大きさが、あって欲しいものです。

自分より弱い立場の人間の過失を、笑って許せる、度量があるのです。
自分にとって、本当に大切なモノは、「家宝」ではないと、心得ているのです。
こんな殿様のためなら、家臣は喜んで、命だって差し出します。

どんなに注意をしていても、過失が起こってしまいます。
そんな時は、笑って、許すようにしましょう。

許すことは、お互い幸せになることでも、あるのです。

「まず自分が」親切にしよう 1071



人間関係で、上手くいかない人がいます。

そんな人の多くは、日頃から他の人に、親切にしていない傾向にあります。

日頃から他の人に、親切にしている人は、他の人も親切を、返してくれるのです。

人間関係が、いつも良好なのです。

ある人が、パソコンの買い換えを、考えていました。

「最近のパソコンは、どんな機能があり、どんなものが売れているのか、今日はほんの下見のつもり」という気持ちで、家電量販店を訪ねました。

すると、販売員はとても親切に、対応してくれました。

時間をたっぷりとって、機能を説明してくれ、売れ筋商品や、業界の裏情報的なことも教えてくれ、質問にもていねいに、答えてくれました。

ある人は、こんな気持ちになりました。

「この店員は、わざわざ時間を割いて、親切に説明をしてくれた。おかげでパソコンの最新情報がわかった。また、このお店に出向いて、この人から買おう」

ある人が、膝の痛みで、悩んでいました。

「詳しく膝の痛みの原因を、教えてもらい、少しでも膝の痛みが、なくなるようにしたい」という気持ちで、遠く離れた整形外科病院を、訪ねました。

すると、医師はとても親切に、対応してくれました。

時間を十分取って、レントゲン等を見せながら、膝の痛みの原因を、詳しく説明してくれ、患者の質問にも、ていねいに答えてくれました。

今後の治療の進め方について、痛みが取れるような見通しの治療方法を、示してくれました。

ある人は、こんな気持ちになりました。

「この医師は、十分時間を持って、わかるように親切に、説明してくれた。遠く離れた病院だけど、医師の先生を信頼して、ぜひ治療を続けていきたい」

このように、相手から何かをしてもらったり、何かを与えられると、こちらもお返しが、したくなるのが、人間の心理です。

この心理のことを、「好意の返報性の法則」と、呼んでいます。

人間関係において、相手に応援・協力してもらいたかったら、まず自分が応援・協力してあげることです。

相手に親切にしてもらいたかったら、まず自分が、親切にしてあげることです。

そうすれば、相手の自分に対する態度が、望ましい方向に、劇的に変わっていくのを、痛感するでしょう。

たとえ自分が、相手に何かをしてもらう立場であっても、「まず自分が」親切にすると、人間関係が格段に、楽しくなるでしょう。

他人に必要以上に期待しない 1072



「あの人なら、お願いしたことを、必ずしてくれる」「彼女なら、自分の気持ちが、わかってくれる」「あの上司なら、私に優しい言葉を、かけてくれる」「自分の子どもなら、きっといい高校に、合格できる」など、人は、他人に強く期待します。

その期待が、上手くいけばいいのですが、期待通りでなかつたり、期待を裏切られる場合も、多くあります。

そんな時は、怒りが込み上げたり、不満が残ったりします。

期待された人にとっては、困った期待なのです。

期待した人にとって、一方的で都合のいい期待、強い期待、レベルが高い期待だったのかかもしれません。

あるテレビ局が、20代の若いカップル100組を対象に、どういうときに恋人に対して、不満になるかを、尋ねたことがありました。

すると、次のような答えが、返ってきました。

- 会いたいのに、忙しいと言って、合ってくれないとき
- 誕生日を、大切にしてくれないとき
- ファッショントを、ほめてくれないとき

今度は30代の夫婦100組を対象に、同じ質問をしました。

すると、次のような答えが、返ってきました。

- 夫が子どもの面倒を、見てくれないとき
- 夫が休日、どこにも連れて行って、くれないとき
- 妻が自分の食べたい料理を、作ってくれないとき

これらの返答には、世代を超えた共通点があります。

それはなんでしょうか。

相手に対して、自分の期待通りに、動いてもらおうと、考えていることです。

言い換えると、相手を自分の思い通りに、コントロールしようとしていて、それがままならないから、不満になってしまうのです。

一般の人間関係も、例外ではありません。

人間関係で、不快な思いをしたくなれば、相手に過度の期待を、寄せないことです。依存しないことです。

そうすれば、不満になることもないし、フラストレーションだって、たまりません。

そして、期待通りに動いてくれたときだけ、「ありがたい」と、考えるようにすれば、いつまでも良好な関係で、いられるのです。

「ここだけの話」に気をつけよう

1073



ヒソヒソ話が、好きな人がいます。
いろいろな秘密のこと、興味がある人は、多いでしょう。

しかし、誰かがヒソヒソ話を、している姿を見ると、あまりいい気持ちはしません。
ヒソヒソ話の中には、人の悪口、知られたくない個人情報や秘密などが、多いのです。

あるとき、会社の職員採用見習い期間に、優秀な人がいました。
ところが、1ヶ月もたたないうちに、会社はその人を、不採用としました。

理由は、次のようなことでした。
「あの人は、確かに優秀だったが、信用できなかった。彼は、いろんな人と雑談すると、決まって『ここだけの話ですが』と前置きして、他人の秘密を口外した。本来他の人が知ってはならないことまでもね。ということは、会社の社長や職員だって、陰でどう言われているかわからない。だから不採用としたのだ」
この話は、私たちにも大いに、参考になると思います。

たとえ悪口でなくても、「ここだけの話ですが」という言葉を多用すると、聞かされた相手は「この人は、口が軽いなあ」と、警戒心を、強めるようになります。

信頼を得るために、「あなただけに、秘密を明かします」と、いう意味で「ここだけの話ですが」と、言う場合もあるでしょうが、逆効果になる場合が、多いのです。

ですから、「ここだけの話ですが」は、できるだけ言わないようにしましょう。
あわせて他人の秘密は、絶対に口外しないことです。

そうしてこそ、初めて相手は、安心感を抱くようになり、その安心感が、双方の信頼関係を、より強固なものにしてくれなのです。
「ここだけの話」に、十分気をつけましょう。



人に喜んでもらおう 1074



商売をしている人で、なかなか商品が売れない、会社が儲からないと、困っている人もいると思います。

そこで、どうしたら商売繁盛するのか、そのヒントになる昔話を、紹介します。

昔むかし、ある村に「湊屋（みなどや）」という、商屋があつたそうな。

何代も続いてきた、老舗じやつたが、どうも最近、儲からん。

そこで老夫婦は、あるアイデアを、思いついた。

米や味噌などを、買ったり売ったりする時に使う、軽量枠（ます）。

この軽量枠に、ほんの少し大きいものと小さいものを作り、大きい枠を「買い枠」として、仕入れる時に、小さい枠を「売り枠」として、売る時に使う事にしたんじや。

つまり、量をごまかして、仕入れ先から同じ金額で、大目に仕入れ、お客様には同じ金額で、少なく売ろうと、考えたのじやな。

少しづつじやが得をして、シメシメと思っておったのもつかの間。

「どうも、湊屋さんは、勘定よりも多く品物を取られる。取引を控えた方がええ」

「なんだか、湊屋さんの商品は、最近盛りが少ない」

と、悪いウワサがすぐに広がり、店は余計に傾いてしもうた。

さて、この店には、1人のグータラ息子がおったが、ある日、この息子に嫁がやってきた。

実はこの嫁っこ、「湊屋ほどの商屋が、つぶれるのは惜しい、私が嫁入りして、立て直したい」と考えて、嫁にきたのじやった。

嫁入り後、とうとうある日、「売り枠」と「買い枠」の秘密を知った嫁は、なんと、この枠をまったく逆にして、使う事にした。

つまり、仕入れる時は、小さい枠を使って、仕入れ先を儲けさせ、売る時は大きい枠を使って、お客様に得をさせるようにしたのじや。

すると、

「最近、湊屋さんは、買った品物よりも、余計に支払ってくれる」

「湊屋さんで買うと、品物の量が、多くて得じや」

と、良いウワサが、すぐに広がった。

「取引したい」という仕入れ先が、次々と良いものを、安く売りに来る・・・。

店にはお客様が、行列を作る・・・。

あっという間に、店は立ち直って、商売繁盛になったという事じや。

メデタシ、メデタシ。

昔から、「損して得取れ」と言います。

この昔話に出てくる商屋は、最初、それとまったく逆の事を、やってしまった。

目先のこすい儲けに、目を奪われて、「負のスパイラル」に、入ってしまったのです。

まず、自分たちではなく、お客様を喜ばせる。

そうすれば、「お金は、後からついてくる」のです。

大成功している人は、皆、その事を知っているのです。

タダでご馳走にならない 1075



「あの人はケチだから、タダで食事を、おごってくれない」と、平気で言つていませんか。そんな人は、相手がケチではなく、本当は自分が、ケチなのかもしれません。

あるプロスポーツの人気チームでは、選手たちに「宴席などで、ご馳走になる事」を、一切禁止しているそうです。

理由は、ひと言で言えば、「借りを作らない」ためです。

例えば、料亭でタダで、ご馳走になった相手から、「今度、○○選手のサインを、もらってくれないか？」と頼まれたら、断りにくい。

他人から安易に、ご馳走になると、あちこちに「借り」ができる、結局は、本人のクビが、締まってしまうから、「ご馳走になるのは、禁止」というわけです。

笑福亭鶴瓶師匠が、銀座の高級クラブで、楽しく飲んでいた時の事です。

何しろ鶴瓶師匠、「見間違えようがない」ほど、特徴的な顔と声の持ち主なのです。クラブで飲んでいても、とても目立ってしまいます。

すると、当然、「お近づきになりたい人」から、師匠の席に「シャンパンやワインの差し入れ」が、入る事があります。

「あちらの席に、これを」というやつです。

高級クラブのお客ですから、決して怪しげな人たちでは、ありません。

それでも、師匠はいっさい、そうした差し入れは、受けないのだそうです。

ただ、断るだけでは、ありません。

差し入れを断った後で、ニコニコしながら、その席へ行って、こう言うのです。

「どうもありがとう。でも、ボクは、芸人として、自分のお金で飲む事に、決めているのです」

そして、その席で握手をしたり、サインに応じたりと、サービスをする。

お金に関する事は、キチッとしつつ、相手へのフォローも、怠らない。

一流ですね。

お金は、たとえ少額でも、「魔物」です。

よく知った先輩が、「今日は、おごりだ！」と、言つているのに、断るのは辛いですが、キツチリしておくことに、越した事はありません。

タダほど、恐いものは、ないのです。

「自分のせい」で上手くいく 1076



「全員が『悪人』の家」という話をします。
あるところに、「いつもケンカばかりしている一家」と「ぜんぜんケンカをしない一家」が、隣り合って住んでいました。

ケンカばかりしている一家は、それはそれは、つまらない事で、毎日ケンカが絶えません。例えば、床に置いてあった本に、奥さんがつまずき、崩してしまったら・・・。
「ちょっと、誰よ、こんなところに、本を積みっぱなしにして！」
「オレだ！ ああっ、せっかく順番どおりに、積んであったのに、バラバラになってしまったじゃないか！ もう少し注意して、歩かんか！」
「アンタがこんなところに、本を積んでおくのが、いけないんでしょう！」
と、あっという間に、ケンカになる。

そんな、「ケンカ一家」のダンナさん。
「いったい、隣りの家は、どうしてぜんぜんケンカを、しないのだろう・・・」と不思議に思い、ある日、「仲良し一家」のダンナさんに、聞いてみます。

「お宅は、いつもニコニコとして、ぜんぜんケンカを、していないようですが、何か秘訣でもあるのですか？」
すると、「仲良し一家」のダンナさんから、耳を疑う返事が、返ってきたのです。

「ウチは皆、悪い人間ばかりなので、ケンカにならないんですよ」

えっ？ と思う「ケンカ一家」のダンナさん。
今のって、「良い人間ばかり」の言い間違いでは・・・？
不思議に思っていると、「仲良し一家」の家の中から、奥さんの声が聞こえてきます。

「あら、ごめんなさい。せっかく本が床に、積んであったのに、つまずいて崩してしまいました」
それに対して、お姑さんの声。
「私の方が悪かったわ。息子がこんなところに、本を積んでいるから、片付けようと思っていたのに、つい、そのままにしていたのよ」
すると今度は、家の中へ向かって、ダンナさんが叫びます。
「いや～、そんなところに、本を積んでおいて、オレこそ悪かった。ケガは無かったか？
片付けるから、そのままにしておいてくれ」

この会話を聞いていた「ケンカ一家」のダンナさんは、すべてを理解しました。
「なるほど。仲良し一家では、みんなが『私が悪い、私が悪い』と、言っている。たしかに全員が〈悪い人間〉だ。これは、たしかにケンカに、なるはずがない・・・」

いつも「自分のせいで」と考える人は、上手くいくのです。
責任を相手に求めるのではなく、自分に求めることが、優しさなのです。

分け合うことで幸せ 1077



友だちと一緒に、あるレストランで、食事をしました。
友だちと仲良く、おしゃべりをしながら、注文した数種類の料理を分け合って、食べたところ、とっても料理が、美味しく感じられました。

そこで、後日1人だけで、同じレストランに行き、同じ料理を食べましたが、何故か以前ほど美味しく、感じられませんでした。
このような経験を、したことがある人も、いるのではないでしょうか。

その少年の夢は、宅配のピザを1人で、全部食べる事でした。

大好きなピザなのに、いつも弟と分けなくてはなりません。
1度でいいから、ピザ1枚を1人で、思い切り食べてみたい・・・。

ある日、少年は両親と弟が、出かけているスキに、お小遣いをはたいて、ピザを注文しました。
夢を実現するために。

**でも、何かが、違っていたのです。
いつもはあんなに美味しいピザが、なぜか美味しい・・・。**

そこに弟が、帰ってきます。
「あっ、ピザだ」
「うん、お兄ちゃんが、頼んだんだ」
そして、少年は弟に、こう言います。
「いっしょに食べよう」

**2人で食べるピザは、いつもの美味しいピザに、戻りました。
少年は、ピザが美味しい理由を、初めて知ったのです。
世の中には、「シェアする幸せ」というものが、あるのです。**

**人と分け合うことで、強く幸せを、感じるので。
美味しさと幸せ感が、さらに高まるのです。**



人に惚れられよう 1078



あの人の言うことや頼みごとは、どんなことでも、素直に聞き行動できる。こんな人は、あの人ことを尊敬し、惚れているのです。

惚れている人がいる人は、とっても幸せな人だ、と思います。もちろん自分が、他の人から惚れられているなら、さらに幸せなのです。

ある時、権力絶頂期にあった秀吉が、己の力を見せつけようとして、家康に、**自分の財産を披露した事が、あったそうです。**
金銀財宝をみせられた家康は、しきりに感心するばかり。

調子に乗った秀吉は、「家康どのは、どのような財宝を、お持ちかな？」と水を向けます。すると、家康は、物おじする事なく、こう答えたそうです。

「私は、貧乏な地方の大名ですから、このような財宝を、持っておりませぬ。ですが、私のためなら命を惜しまない旗本が、1万騎ほど、おりまする」

この言葉を聞いた秀吉は、恥じ入ると共に、「家康、あなどり難し」の思いを、強くしたという話です。
人の上に立つ者は、どんな時も、「自分を支えてくれる人たち」の存在を、忘れてはいけません。

いや、人の上に立つ者だけでは、ありません。
人は誰でも、誰かに支えられて、生きてています。

「自分を支えてくれる人たち」に、「自分を惚れてもらう」。
もし、本当に「惚れてもらう事」ができたら、これほど強みは、ありません。
「カリスマ経営者」と呼ばれる人たちも、その多くは、一見、「ものすごくワガママ」なのですが、皆、従業員に「惚れられて」いました。

松下幸之助は、会社で散々に叱り飛ばした、部長の自宅へ電話をかけて、奥さんに、こんな事を言った、というエピソードが、残っています。

「今日、ご主人は、しょげて帰ってくるだろうから、夕飯にお鉢子の2、3本でも付けてやって欲しい」
こんな細やかな気づかいが、社員から「惚れられる」のですね。

あなたは、自分のために、「何でもするよ」と言ってくれる人を、持っていますか？
常に自分を支えてくれる人を、大切にして、優しく態度で、接するようにしましょう。

長年の思いやりと努力が、あなたを周りから、惚れられる人に、成長させていくのです。

お礼は3度 1079



人から、いいことをしてもらった時に、お礼を言います。
お礼を言うのは、ほとんどの場合は、1度だけです。

しかし、機会あるごとに、何度でもお礼を言うことで、お礼の気持ちが伝わり、心が通い合うように、なることもあります。

銀座のクラブのママであり、企業でマナーや接客のセミナーを、開催する有名人がいます。
その人は、お店のスタッフに「お礼は、3度」と、教えていました。

例えば、お店の常連客に、食事をご馳走になった時。

1度目は、その場でお礼を言う。

2度目は、その日のうちか、翌日には電話かメールで、お礼を伝える。

そして、3度目。

これがなかなか難しいのですが・・・。

3度目は、「次に会った時」に、お礼を言うのです。

もし、3年ぶりに訪れたお店で、「あら、○○さんお久しぶり、3年前は、うなぎをご馳走になって、ありがとうございました」と言われたら、「おっ、すごいな」と、思いますよね。めったに食事を、ご馳走になる機会がなければ、覚えていられても、人気のある子だと、ショッちゅう常連さんに、ご馳走になります。

それをいちいち記憶して、次にそのお客様が、来た時の第一声で、お礼を言うのですから、至難のワザです。

だって、うなぎをご馳走してくれた相手に、お寿司のお礼を、言ってしまったら、かえって失礼に、なってしまいますから・・・。

一流のお店は、お客様も一流なので、お客様の方は「ご馳走した事」を、すっかり忘れていても、お礼を言わなければ、悪い気はしない。

高いハードルをクリアして、「次に会った時」に、ちゃんとお礼を、言えるかどうかが、お客様から、人気が出るか、どうかの分かれ目の1つなのです。

何も客商売だけでなく、世の中全般で、使えるワザです。

いつも形式的に、お礼を1度だけ、言っている人は、大いに見習いましょう。

「お礼は、3度」を、心がけると、相手をいっそう大切にする気持ちが、高まるこでしよう。

そして、相手も、大変喜んでくれるのです。

分け合えば喜びと感謝に 1080



相田みつを（詩人）の有名な詩、「分け合えば」の一部を、紹介します。

うばい合えば にくしみ

分け合えば よろこび

うばい合えば 不満

分け合えば 感謝

うばい合えば 戦争

分け合えば 平和

うばい合えば 地獄

分け合えば 極楽

東日本大震災が発生した時、仙台では、ライフラインは翌日復旧しましたが、本や雑誌の流通は、完全にストップ。

子どもたちが、毎週読むのを、楽しみにしている漫画雑誌も、本屋には届きません。

そんなある日。

1人のお客様が『少年ジャンプ』を持ってきて、ある本屋さんに、こう言います。

「これ、ボクはもう読んだので、よかつたら皆さんに、読ませてあげてください」

そのお客様は、『少年ジャンプ』を読みたくて、山形まで行って、購入したとの事。

本屋の店主は、さっそく、店頭に張り紙をします。

「少年ジャンプ 3/19日発売号 読めます！ 1冊だけあります」

店主は、この『少年ジャンプ』を、立ち読み自由にしました。

そう、「シェア」したのです。

それを見た子どもたちが、次々と店にやってきます。

ウワサはすぐに広がり、翌日には、お店に長い列が・・・。

子どもを連れてきて、「ずっと怖がっていた子どもが、ようやく笑ってくれました」と、涙ぐむ母親もいました。

この1冊の『少年ジャンプ』の話は、小さな新聞記事になりました。

すると、この本屋さんに、「この本も置いて、あげて欲しい」と、たくさんの漫画雑誌が、届くようになったのです。

いつしか、店頭には募金箱が、置かれました。

無料で読むのは悪い・・・と、考えた子どもたちが、設置したのです。

店主は、募金箱に入れられたお金を、津波で被害を受けた地域に、本を届けるプロジェクトへ、寄付しました。

数百人の子どもたちに、回し読みされて、ボロボロになった、この『少年ジャンプ』は現在、発行元に、「伝説のジャンプ」として、保管されているそうです。

この『少年ジャンプ』の話は、「シェア」が生んだ、小さな奇跡です。

一人占めは、ツマラナイのです。

分け合えば、皆が喜び、感謝するのです。

相手に合わせて仲良く 1081



人と仲良くなるには、どうしたらいいのでしょうか。
ここでは、人と仲良くなれる、秘訣を紹介します。

「デキる男は、『接待の時に、飲むお酒の種類』に、共通点があります。」

ビール、ウイスキー、ワイン、日本酒など、何でも選ぶ事が、できる銀座のクラブ。
もちろん、銀座御用達のドンペリ（高級シャンパン）もあります。
さて、あなたには、「デキる男」が、接待の時に飲む、お酒の種類が、わかりますか？
えっ？

「お客様には、ドンペリや高級ワインを、振る舞って、自分は定番のビール」ですって？
いやいや、違います。
接待の時に、「デキる男」が飲む、お酒の種類。
それは・・・。

接待している相手と、同じ種類のお酒。

接待相手が、ビールを飲めば、ビール。
ワインを飲めば、ワインを飲む。
相手が、ビールを頼んでいるのに、「ボクは、バーボンを」なんてやっている、ビジネスマンは、「デキない男」なのですね。
相手より、高いお酒はもちろん、相手より、明らかに安いお酒を、頼むのもNG。

ドンペリを飲んでいる目の前で、ビールを飲まれたら、接待される側も、居心地が悪いでしょう。
たとえ下戸で、相手と同じものが、飲めなくても、ノンアルコールビールを、頼むなどして、一緒に飲んでいる雰囲気を、出す方がいいのです。

そもそも、人は、自分と共通点がある相手に、親近感を覚えるものです。
ほら、同郷や出身校が同じ人とは、すぐに打ち解けるでは、ありませんか（＝「類似性の法則」）。

また、人は、自分と似たものを、好ましく思います。
ペットが、飼い主そっくりな事が多いのは、このためです。
「似ている」どころが、人は、自分と同じ仕草をしている人にさえ、好感を覚えます。
だから、初デートでは、相手が取るポーズの真似をするのが、効果的ですね。（＝「ミラーリング効果」）
接待で、相手と同じ種類のお酒を飲む事は、この「類似性の法則」「ミラーリング効果」からも、正しい選択と言えます。

人と仲良くなるためには、相手に合わせることが、早道なのです。
相手に合わせることが、できる人は、柔軟性があり、包容力がある人でもあるのです。
積極的に相手に合わせて、もっともっと、仲良くなりましょう。

「感じない」のが得策 1082



「あの人から、嫌なことを言わされた」「友だちが、この頃冷たい態度を取る」「上司から文句を言わされた」など、心配したり、不安になったり、傷ついたりします。

さらに、こんなことが続くと、何ごとに対しても敏感になり、ほんの些細なことに対しても、ビクビクしてしまいます。

感受性が強すぎて、多くのマイナスな感情が、湧き起こってきます。

「感じすぎる」のも、困ったものです。

魚には、「痛点（つうてん）」が、ないのだそうです。

釣り針をくわえてしまい、釣り上げられるときも、ぜんぜん痛くない。

それどころか、生け作りの刺身になるときだって、包丁で身体を、切られても痛くない。

身体が軽くなって、「んっ？ なんか変だな？」と、思うだけらしい。

ついでにいうと、魚の記憶力は、2秒なのだそうで、イヤなことがあっても、2秒後には、ケロッとしているのです。

他人の言葉や態度に、「傷つきやすい」「腹が立つ」というあなた。

痛点のない魚に、学びましょう！

カチンとくる言葉や話を聞いたら、「感じない、感じない」と、「鈍感力」を、発動するのです。

そもそも、無神経な人って、あなたが、自分の言葉や態度に、カチンときていることに、まったく気が、ついていません。

だったら、こっちも「感じない」のが、得策です。

「感じない」強い心を、持ちましょう。

世の中には、「感じない」方が、幸せであることも、多いのです。



ただ働きもありがとう 1083



「うわーっ、損したー！」「えーっ、たったこれだけー！」って思うこと、ありませんか？

たとえば、あなたが会社や事務所には、所属していない、フリーのイラストレーターだとします。

そんなあなたに、知り合いから「たしか、イラストのプロだったよね。ちょっとイラストを描いて、もらいたいんだけど」と相談が。

自分はフリーとはいって、プロのイラストレーターなので、タダではないだろうと、思ったものの、知り合いからの依頼だし、お金の話をするのも野暮（やぼ）なので、そのまま快く引き受けるあなた。

依頼されたイラストは、初めて経験するタイプのもので、それなりの時間をかけて、完成させました。

「まあ、知り合いだし、謝礼はいくらでもいいや」と、気前よく思っていたのですが、知り合いは、「いやー、助かった。ありがとう！」と、言ったきりで、どうやらお金を支払ってくれるつもりは、なかったようです。

さて、こんなとき、あなたは、どう考えますか？

お釈迦様は、こんなことを、言っているそうです。

「世の中には、損も得もない。ただ、『損だ』『得だ』と、こだわる人の心が、あるだけだ」

「ただ働きかよ！」と、思えば損。

「初めてのタイプのイラストを描けて、いい経験になった」と、思えば得。
それだけのことだ、というのです。

どんな行為も、見返りや報酬を、期待せず、『させていただいて、ありがたい』と、思えば、心穏やかにいられます。

もし、イラストを頼まれたときに、はじめから「知り合いだし、勉強になるから、タダでやってあげよう。私のイラストを評価して、頼んでくれてありがたい」と、考えていれば、「ありがとう」と、言ってもらえるだけで、満足できたはずです。

**「見返り」や「報酬」に、いっさい期待しなければ、「心穏やか」に、いられるのです。
ただ働きも、ありがとうございます。**



お膳立てに感謝 1084



野球の試合で、3点差で負けている9回の裏に、満塁のチャンスをつかみ、そこで、逆転サヨナラ満塁ホームランを打つたら、打った人は、文句なしのヒーローです。

でも、ここでちょっと、考えてみてください。

もし、同じバッターが、ランナーなしで、ホームランを打ったとしたら、どうでしょう。ソロホームランで、たった1点入るだけ。

当たり前ですが、ヒーローでもなんでもありません。

やったことは、「ホームランを打った」という、同じことなのに、かたや「ヒーロー」で、かたや「1点取った人」どまり。

この違い。

ひとえに、その人が打席に立つ前に「チームメイトが、チャンスを作ってくれていたかどうか」に、かかっています。

いわゆる、「お膳立て」を、整えてくれていたかどうかが、分かれ道になるわけです。

お笑い芸人・・・というより、リアクション芸の神様、出川哲朗さんが、ある番組で、ビートたけしさんから、昔聞いたという、忘れられない言葉を、紹介していました。

たけしさんに連れられて、寿司屋に入ったときのことだそうです。

リアクション芸で、人気だった出川さんに、ビートたけしさんは、こんなことを、言ったのだそうです。

「お笑いっていうのは、フリがあつて、フリがあつて、オチがある。ウド鈴木や出川やダチョウ倶楽部が、いつも『オイシイところ』を、もらっているけど、その前に、たけし軍団とかが、振って振ってくれているから、最後に大オチで、大爆笑が起きているんだ。だから、『振ってくれている人たち』への感謝は、絶対に忘れちゃいけない」

この言葉について、出川さんは、「一生忘れられない」と、語っていました。

自分の活躍は、「自分がオイシイところを、持つていけるように、お膳立てをしてくれた人たち」のおかげ。

たとえ、逆転サヨナラホームランを打っても、その自分に、酔いしれるだけではダメ。

その前に出塁して、ランナーになってくれた人たちが、いてこそその逆転ホームランだということを、忘れてはいけません。

その感謝の気持ちを忘れると、いい気になって、思い上がってしまい、後で必ず痛い目をみることになりますので、ご用心、ご用心。

お膳立てに、常に感謝なのです。

お膳立てがあつてこそ、自分が生きるのです。

なんとかしましょう 1085



ミステリーで、はじめから犯人が、わかっているタイプのものを「倒叙（とうじょ）モノ」と言います。

『刑事コロンボ』は、はじめから犯人が、わかっている話でした。

三谷幸喜が、脚本を書いた人気ドラマ、「古畑任三郎シリーズ」は、三谷と番組プロデューサーが「日本で刑事コロンボをやりたい」と考えて、企画した作品です。

独特のしゃべり方で、犯人を追いつめていく、スタイリッシュな古畑役の田村正和が、見事にハマって、高視聴率の人気番組になりました。

さてこれは、そんな人気ドラマの裏話。

ある時の事、まだ完成していない「台本」が誤って、田村正和へ渡ってしまった事がありました。

三谷幸喜は、スタッフを通じて「まだ、矛盾点がたくさんあるから、セリフは覚えないで」と、田村正和に伝えようとしたのですが、時すでに遅し。

田村正和は、自分のセリフを、全部頭に入れてしまったあとだったのです。

今さら、「台本を差し替えます」とは、言いづらい状況。

ピンチ到来です。

完成する前の台本のセリフを、田村正和に全部覚えられてしまった三谷幸喜。
このあといつたい、どうしたでしょう？

古畑のセリフは、すべてそのまで、他の人物のセリフだけを変えて、物語のつじつまを合わせた。

まるで、パズルです。

三谷幸喜は、こう言っています。

「実はそういうのが、ボクは楽しいんですよ。無理難題が降りかかった時に、他の作家なら『無理です！』と言うところを『わかりました、なんとかしましょう』と。何でも受け入れながらも、いいものを創る、自分はそういうふうに、ありたいと思っている」

「制限のある中で、ベストの仕事をするのがプロ」なのです。
どんな時も、「なんとかしましょう」と、意欲を高めるのです。



人見知りは才能 1086



ずっと気に病んでいた悩みが、人から言われたひと言で、パッと消え去る事があります。それを言ってくれた相手が、尊敬する人物だったり、大好きな相手だったりすれば、その「ひと言」の効果は絶大です。

お笑いコンビ「南海キャンディーズ」の「山ちゃん」こと、山里亮太さん。相方の「しづちゃん」こと山崎静代さんが、個性派女優としてドラマや映画に出演し、ちょっと差をつけられた感がありました。最近は、番組のナレーションなど、「声」で、いい仕事をしています。

実は、この山ちゃん。

「人見知り」で、それが大きな悩みだったのだそうです。

その山ちゃんを救ったのは、芸能界の大先輩、タモリのひと言でした。人見知りで悩んでいた、山ちゃんを救った、タモリが彼に言ったひと言とは、どんな言葉だったでしょう？

「人見知りは、才能」

タモリは、やまちゃんに、こう語ったのです。

「タレントとして、テレビで成功するには、面白いだけではダメで、その場がどういう状況なのかを、感知する能力が必要。『その場の状況や流れ』を感知できず、どこでも同じノリで、やってしまうヤツは、生き残れない。」

そもそも『人見知り』とは、他人の言動や反応をよく観察し、思いを巡らしてしまうあまり、『こんな事を言ったら、嫌がられるのではないか』と、相手のリアクションを想像してしまって、相手としゃべれなくなってしまう人の事。

この『相手のリアクションに、思いが及ぶ事』こそが、『神様から与えられた、素晴らしい才能』である。

もし、『こんな事を言ったら、嫌がられるんじゃないかな』がわかるなら、逆に『これを言つたら、喜ばれるんじゃないかな』も、想像できるはず。

だから、『人見知り』は、欠点どころか、タレントとして生きていく上で、最高の武器になる」

すごい説得力ですね。

この言葉を聞いた時、山ちゃんの目からウロコが、100枚くらい落ちるのが、目に浮かびます。

ある番組の中でも、タモリさんは、「芸能界で戦っていく人は、人見知りしか、成功しない」と、言っているのです。

悩みでも、見方を変えれば、強みにもなるのです。

ピンチを楽しみ、飛躍しよう 1087



プロスポーツ選手のメンタルカウンセラーの権威である、スポーツ心理学者・児玉光雄教授は、こう言っています。

「ピンチを楽しめるようになつたら、一人前」

プレッシャーに弱い、プロゴルファーのメンタルカウンセラーとして、「ピンチになつたら、笑顔を作り、『ピンチを見事に脱出することは、楽しい』と、心の中でつぶやいてから、スイングを开始しなさい」と、アドバイスしているそうです。

本来、ゴルフは困難を楽しむスポーツ。

「もし、ゴルフのコースにバンカーがなかつたら、本当にツマラナイだろう」という言葉を聞いたことがあります。

児玉教授は、さらに「(スポーツにおいては)『成功をしている良いイメージを描ければ、必ず夢はかなう』という発想より、むしろ『悪いイメージが、浮かび上がったとき、それを打ち消そうとするのではなく、それを受け入れて楽しむ』くらいの気持ちの方が、よい結果につながる」

つまり、「最悪の事態を想像し、そんな状況なのに、余裕たっぷりで問題を解决している、自分を思い描きなさい」という事です。

ここで、イチローのエピソードを紹介します。

高校に入った当時は、ピッチャーだったイチローが、「バッターに専念するきっかけ」になったのは、「交通事故」だったのだそうです。

高校2年の春に、自転車に乗っていて、ライトバンに追突されてしまったイチロー。この事故で一時的に、速い球を投げられなくなり、監督によって外野手に、転向させられたのです。

イチローは、「交通事故さえなければ、きっとピッチャーを目指していた」と語っていて、「打者として、プロを目指すきっかけを作ってくれたのは、この交通事故なんですね」と、事故に対して、感謝の言葉を残しています。

イチローは、「交通事故」というピンチさえも、飛躍のきっかけに、変えてしまったのです。ピンチを楽しみ、チャンスに変え、大きく飛躍できるのです。



願いはすべて聞いてもらえる 1088



初詣や旅行などで、お寺や神社へ行ったとき。

あなたは、神様に何を、お願ひしますか。

神様に手を合わせる時って、自分が本当に望んでいることと、素直に向き合ういい機会です。

そんな「神様へのお願ひ」について、とても感動的な詩を、紹介します。

『神様のおもんばかり』

大きなことを成し遂げるために

力を与えて欲しいと神に求めたのに

謙虚さを学ぶようにと弱さを授かった

より偉大なことができるようになると

健康を求めるのに

よりよきことができるようになると病弱を与えられた

幸せになろうとして

富を求めるのに

賢明であるようにと貧困を授かった

世の人々の賞賛を得ようとして

成功を求めるのに

得意にならないようにと失敗を授かった

人生を楽しもうと

たくさんのものを求めるのに

むしろ人生を味わうようにとシンプルな生活を与えられた

求めたものは何一つとして与えられなかつたが

願いはすべて聞き届けられていた

私はあらゆる人の中で

もっとも豊かに祝福されていたのだ

いかがですか？

まったく同じ人生を歩んでいても、「貧乏で、不健康で、成功することもなかつた。私の人生は最悪だった」と言う人と、「普通の暮らししができて、大病もせず、夢を追いかけて過ごすことができた。私の人生は幸せだった」と言う人がいます。

幸せかどうかを決めるのは、結局、自分なのです。

あなたの中にいる、神様が決めているのです。

神様は、あなたの味方なのです。

そして、願いはすべて、聞いてもらっているのです。

失敗をさらけ出そう 1089



想像もしていなかったような、「とんでもない大失敗」をした経験。
あなたにも、何度かは心当たりがあると思います。

どうしたら解決できるか、まったくわからないほどの大失敗の時は、途方に暮れてしまします。

そんな時は、いったいどうすれば、いいのでしょうか。

ある大学の生協で、アルバイトの職員が「ポッキー」や「プリツツ」などのお菓子を320個仕入れようとして、3200個も発注してしまったのです。

「1セット10個入り」という表示を見逃したために、起こってしまったミスですが、届いた商品の山を見て、青ざめたのは、生協職員たち。

さあ、もしあなたが職員だったら、いったいどうしますか。

困り果てた職員たちが、選択した方法。

それは「失敗をさらけ出し、本気でお願いする」ことでした。

自分たちのミスによって、とんでもない数のお菓子が、届いてしまったことを、正直に学生たちに伝えて「何とか、買って下さい！」と、「本気でお願い」したのです。

職員たちは、食品売り場だけでなく、食堂や書店など、大学内のあらゆる場所に、商品を置き、そのすぐ横に大きなPOPで、こう書きました。

「HELP！ 誤ってポッキー・プリツツが3200個届いてしまいました。思っていた数のなんと10倍です。皆さんの声かけをたくさんの人々に、よろしくお願いします」

さらに、このPOPの下には、日々の販売個数を表示して、「夢の完売まで、あと何個」というカウントダウンの数字が、わかるようにしました。

そうしたら、学生たちが面白がって、ツイッターやLINEで「〇〇大学生協ポッキーだらけ！」などと写真付きで拡散。

「買ったよ」「私も！」と、どんどん盛り上がり、通常の100倍ものケースで売れて、無事に完売することができたのです。

これ、もし職員たちが誤発注を隠して、ただ単に「ポッキー、プリツツ大安売り！」なんてフェアをやったとしても、上手くいかなかつたでしょう。

「間違えて、10倍もの数のポッキーを発注してしまった」というとんでもない失敗。

それを隠さずにオープンにし、「助けて下さい」と本気でお願いしたことが、多くの学生の心を動かしたのです。

人は、真剣にお願いされると弱いもの、たとえ店舗の担当者からのお願いでも、真剣なお願いなら、一度くらいは聞いてあげようとするものです。

そもそも、人助けって、助けている側も、ちょっとイイ気分になれますものね。

ピンチの時は、隠さないほうがいい。

さらけ出したほうが、上手くいく。

これは、何も「ミス」だけに、限った話ではありません。

自分の欠点や、苦手なこと、恥ずかしいところだって、ときには隠さずに、さらけ出してしまって、いいんです。

そんな素直さを持つあなたに、周りの人も手を、差し伸べてくれるのです。

危険を事前に察知しよう 1090



塚原ト伝（つかはらぼくでん）という剣豪を、ご存じでしょうか。

囲炉裏（いろり）の前で食事をしている時に、背後から斬りかかられて、とっさに鍋のフタを楯がわりにした・・・というエピソードで有名な人です。

生涯に19回も真剣勝負（=本物の日本刀での命がけの勝負）をして、1度も負けなかつたというのですから、強かったことは確かなようです。

さて、このト伝さんが、3人の息子のうち、誰を自分の剣術の後継者にするかを、決めるためのテストをした、という話が残っています。

テストの方法は、「座敷の入口に、中に入ろうとすると頭に鞠（まり）が落ちるような仕掛けをして、どんな対処をするかを見る」というものでした。

まず、長男。

彼は、座敷に入る前に仕掛けに気がつき、その鞠を外してから、中に入りました。

次の次男。

彼は、座敷に入ろうとした瞬間、何かが頭に落ちてくることを感じて、刀に手をかけましたが、それが鞠だと気がつくと、そのまま座敷に入りました。

最後の三男。

彼は、頭に落ちてきた鞠を、とっさに抜いた刀で、ものの見事に真っ二つに斬ってから、座敷の中に、入りました。

さあ、この3人の息子のうち、剣豪・塚原ト伝が後継者に選んだのは、誰だと思いますか？ちょっと考えると、落ちてきた鞠をとっさに斬った三男が、1番すごいように思えますよね。

でも、ト伝さんが後継者に選んだのは、長男でした。

理由は「危機を事前に察知する能力に、秀でているから」。

ト伝さんは、次男はある程度評価したものの、鞠を真っ二つに斬った三男に対しては、「未熟！」と断じたそうです。

「それくらいの危機を察知できないとは、修行が足りない！」というわけです。

中国の兵法書『孫子』の中にも、最高の勝ち方は「戦わずして勝つこと」とあります。現代社会においても、「危機に陥ったときに、うまく処理できる人」よりも、「リスク管理がしっかりでき正在して、そもそも危機を回避できる人」のほうが、すぐれていることは、言うまでもないでしょう。

天下無敵の剣豪は、リスク管理という点でも、すぐれていたからこそ「無敵」を維持できたのかもしれません。

危機を事前に察知する能力は、安心・安全を確保してくれる素晴らしい能力なのです。

捨てるものはない 1091



島田洋七（しまだようしち 漫才コンビで活躍）が、子どもの頃にいっしょに過ごした、おばあちゃん（佐賀のがばいばあちゃん）の思い出話です。

家の前の川を「スーパー・マーケット」として、活用していたばあちゃん。木の枝や野菜、果物のみならず、古くなった下駄や着物、ブリキの玩具、空き箱や空き瓶、誰が捨てるのか、流れてくるものは、何でも拾って再利用していた。

はじめは、捨てられたものを拾うことに抵抗があったし、友だちや近所の人に見られるのも恥ずかしかった。でも、どんなものでも、それがばあちゃんの手で見事に、再利用されるさまを見ているうちに、だんだん面白くなってくる。

「拾うものはあっても、捨てるものはない」
ばあちゃんの言っていることは、ホントだと思うようになった。

ばあちゃんの「何でも再利用」は、これだけじゃない。出かけるときは必ず、長い紐の先に磁石をくくりつけ、それを腰に巻きつけて歩くのだ。そうすると、釘や鉄くずが磁石にくっついてくる。バケツ一杯くらいはすぐにたまり、それを売ると割合にお金になった。

ある日のこと、俺とばあちゃんは、どこかに出かけようと、バスを待っていた。もちろん、ばあちゃんは、その日も磁石つきの紐を、腰に巻きつけていた。バスが来て俺が先に乗り込んだが、ばあちゃんが、なかなか乗ってこない。「ばあちゃん、どうしたの？」

振り返ってみると、ばあちゃんは、うんうん唸りながら、腰につけた紐を引っ張っている。「大物だ、手伝え！」

「あの・・・」
そのとき、バスの運転手さんが、俺たちに声をかけた。
「磁石が、車体にくっついているみたいなんですけど・・・すみません、バスは持つて帰らないでください」

ばあちゃんが、引っ張り上げようとした「大物」は、なんと「バス」だったのだ！さすがの俺も、顔から火が出るほど、恥ずかしかった。

ばあちゃんにとって、世の中に、捨てるものは、何一つないのです。
必死になって、どんなものでも、大切にしているのです。

今の世の中は、悲しいことに、何でも気軽に捨ててしまう時代です。
しかし、ばあちゃんのように、全てのものを大事にする心が、とても大切なのは、ないでしょうか。

花で人に幸せを 1092



これは、ある花屋の女性の話です。

実は彼女は、子どもの頃、体が弱くて入退院を繰り返す日々を送っていました。

そんな彼女をなぐさめてくれたのが、病室に飾られた花だったのです。

「花は、人をなぐさめて勇気をくれる。私は大人になったら、花屋さんになって、たくさんの人たちを勇気づけたい」

病室で自分の心を癒してくれる花を見て、彼女はそう決心しました。

やがて、フラワーデザイナーとなり、東京で起業します。

仕事は、企業のイベントやウエディングでの会場装花。

しかし、会社を維持するのは、簡単ではありませんでした。

スタッフを抱え、日々の仕事に忙殺されます。

そんな時、あの東日本大震災が、発生したのです。

彼女の会社の生命線である、企業のイベントやお祝い行事は、軒並み「自粛」により中止になりました。

入っていた仕事は、すべてキャンセル。

その後も、まったく注文がない日々が続きます。

途方にくれた彼女は、とうとう会社をたたむ決心をします。

花屋をやめる決心をした彼女は「どうせもう卖れない花なら・・・」と、1000本のヒマワリを持って、東北へ向かいました。

被災した人たちへ、ひとりに1本ずつ、ヒマワリを渡して、少しでも元気になってもらおうと、思い立ったのです。

被災地でヒマワリを配ろうとすると、あっという間に、行列ができたそうです。

そのひとりひとりに、ヒマワリを渡す彼女。

彼女からヒマワリを受け取った人たちからは、こんな声が・・・。

「ありがとう、生の花を久しぶりに見た気がするよ」

「ありがとう、花を眺めて暮らすと、元気が出るわ」

「ありがとう」

「ありがとう」

「ありがとう」

被災者の人たちの感謝の言葉を聞いて、彼女は思い出しました。

私も子どもの頃、病室で花によって生きる希望を、持つことができたんだっけ・・・。

「そうだ。花を通して、ひとりでも多くの人に、幸せになってもらいたい！」 そう思って花屋になったのに、忙しくて、いつの間にかそれを忘れていた！」

東京に戻った彼女は初心に戻り、「花で人に幸せを届ける」をコンセプトに、新たな事業をスタートさせました。

彼女は現在、「人と人を結ぶお花屋さん」の代表として、多忙な日々を送っています。

一時、花屋をあきらめかけた彼女を救ったのは、「花を受け取る人たち」の笑顔だったのです。

花には、人を笑顔・幸せにする、大きな力があるのです。

すぐに成果を求めない 1093



お釈迦様にまつわるエピソードを、紹介しましょう。

あるとき、弟子の1人がお釈迦様に、こんな質問をしたことがありました。
「志を遂げるために、1番大切なことは、何でしょう？」

すると、お釈迦様は、大きな花を指しながら、次のように答えました。

「あそこにある花は、この春、種をまいたものだ。
それから、しばらくして、芽が出てきた。
もし、芽のうちに、引っこ抜いてしまったら、どうなるか。
花は絶対に、咲くことはない。
志というものは、花と同じで、成就するまでに、ある程度の時間がかかるものなのだ」

お釈迦様は、願望の達成には、時間が必要であって、「こうなりたい」「ああしたい」と焦っても、一朝一夕というわけにはいかないと、弟子に伝えようとしたのです。
機が熟すのを、待つくらいの気持ちでいることが重要です。

願望は、花のようなもので、芽の段階では、花が咲きません。
季節を待つことが、大切なことです。

「頑張って行動しているのに、少しも状況が好転しない」と、そこで願望の芽を、引っこ抜いてはならないのです。
「これからどんどん成長していき、じきに大輪の花を、咲かせてくれる」と、あくまで期待し、前向きな気持ちで、いるようにしましょう。

すぐに成果を、求めないことです。
努力した分だけ、後になって成果は、必ず現れるのです。



お金を有意義に使おう 1094



インドに、次のような昔話があります。

ある村にAさんとBさんという、2人の金持ちがいました。

Aさんは村人たちに、いつもお酒やご馳走を振る舞っていたので、みんなから慕われていました。

しかし、Bさんはそんなことは、あまりしませんでした。

そのため、村人たちから「お金があるくせにケチだ」と、陰口を叩かれていました。

あるとき、村に大雨が降り、洪水が起きました。

このとき2人の行動は、実に対照的でした。

Aさんは全財産を持って、別の国へ逃亡してしまいました。

それに対して、Bさんは村にとどまり、堤防を築くお金を、拠出したのです。

そうです。

Bさんは、ケチではなかったのです。

ここぞというときには、お金の出し惜しみをしない、僕約家だったのです。

言い換えると、お金の「使い方」が、Aさんとは違っていたのです。

Bさんのおかげで、村は洪水の被害が減り、村人は安心して、暮らせるようになりました。その後、Bさんの評判は一変し、村人から感謝され、尊敬されるようになったというのです。

お金は、使う人の考え方によって、有意義にもなれば、その逆にもなります。

使う人の人格によって、その価値が決まってしまうのです。

人は、お金の使い方を、いつも見られているのです。

ぜひ、いざという時に、人のために使いたいものです。



誰かが見ている 1095



西洋に、こんな民話があります。

ある貧乏な男が、近所の麦畠から麦を盗もうと考え、真夜中に末の娘と共に、他人の畠にやってきた。

そして、「誰か見ている人がいたら、教えるんだ」と、幼い娘に見張り番をさせて、自分は畠に入って、麦を刈りはじめた。

しばらくすると、娘が突然言います。

「お父さん！ 誰かが見ている！」

ギョッとして、父親はあたりを見まわしますが、人っ子ひとりいません。

麦刈りを、再開する父親。

ところがしばらくすると、また娘が言います。

「お父さん！ 誰かが見ている！」

父親は麦刈りを中断して、再びあたりを見まわしますが、やっぱり誰もいません。

「いったい、誰に見られているって言うんだ！ 誰もいないじゃないか！」

父親が怒ってそう言うと、娘はこう答えたのです。

「お空の上から、誰かが見ているの！」

「天網恢々疎（てんもうかいかいそ）」という、中国のことわざがあります。

これは、「天は、どんな小さな悪も見逃さず、天罰を与える」という意味です。

「神様は、お見通しだぞ」ってことです。

中国には他にも、「これは2人だけの秘密だ・・・と言って、不正を働いても、必ずバレる」という意味で、「天知る、地知る、我知る、人知る」という言葉があります。

神様が見ているのは、何も悪事だけではありません。

あなたが「イイこと」をした時も、ちゃんと見てくれています。

必ず誰かが、見ているのです。

誰にも恥じない、生き方をしましょう。

全員最優秀賞 1096



かつて芸術家の岡本太郎は、子どもの絵の審査員を頼まれた際に、最後に壇上に上がって最優秀者の発表をする時に、こう言つたそうです。

「全員、最優秀賞です！」

「えっ？ 全員ですか？」と、あわてる主催者たち。

「そう、全員すばらしい！ 全員に賞をあげてください！」

なかなか痛快な話です。

そもそも岡本センセイ、「子どもこそ真の芸術家」と考えている人でしたから、子どもの絵に順位を付けるなどという愚行は、するわけがないのです。

センセイは、3歳くらいまでは、心のままに絵を描いていた子どもたちが、まわりの大人たちの目にさらされて。「うまい」とか「ヘタ」とか言われるうちに、絵を描くのをやめてしまうことについても、激しく批判しています。

ここで、子どもの絵に関する「紙の金メダル」のお話をします。

美術教師をしている小林（仮名）が、ある時、小学校に代理教員として、絵を教えに行つた時の話です。

授業では、児童たちに、校庭にある大きな木の写生を、させていました。すると。

ひとりの児童が、木の幹を紫色に、塗っているではありませんか。

驚いた小林さんは、その子に話しかけます。

「よくあの木を見て？ こういう色じゃないんじゃないかな？」

するとその子は、こう答えたのです。

「いいんだ！ 僕は紫が1番好きな色なんだ。僕はこの木が、1番好きな木だ。だから、1番好きな色を、1番好きな木にあげたんだ！」

この言葉を聞いた小林さんは「やられた！ 子どもに教えられた！」と思います。

しかし、今の教育では、木を紫に塗った子に「最高点」をあげることはできません。

考えた小林さんは、自分で紙の金メダルを作って、その子にあげたのです。

「学校の都合で、5点の評価はあげられないけど、先生はこの絵は、とても素晴らしいと思う。だから、特別にこの金メダルをあげます！」

そんな出来事から、何年も経つてからのこと。

小林さんは、ふと思い立って、この出来事をラジオ番組に、投稿します。

ハガキは採用され、放送。

すると、驚いたことに、たまたまその放送を聴いていた、あの時の児童本人（すでに大学生っていました）から、小林先生のもとに、手紙が届いたのです。

その手紙には、こんなことが、書かれていました。

「あの時、先生からもらった金メダルは、今も大切に持っています」

手紙には、大学生になった彼が、あの金メダルを首からさげた写真が、同封されていました。さらに、手紙の続きには、こうあったのです。

「僕は今、絵の勉強をしています。将来は画家になりたい、と思っています」

木の幹を紫色に染めた子。

その子の絵を、認めてあげた先生。

岡本太郎の考えが、正しいのがよくわかります。

全員が、最優秀賞なのです。素晴らしい感性を、持っているのです。

乾杯の数だけ幸せに 1097



西洋の古いことわざのクイズです。
○○の中に入る、漢字2文字の言葉は、何でしょう。

「人は、○○の数だけ、幸せになれる」

ヒント1 きっと、あなたは、今までの人生で、何度もやっていることです。
ヒント2 ひとりでは、できません。
ヒント3 誰かと楽しく、会っている時や、小さな「お祝い事」があった時に、これをします。
ヒント4 居酒屋では、たくさんの人たちが、これをやっています。

もう、おわかりですね。
答えは「乾杯」。

ある時は、友との再会を喜び。
ある時は、愛する人という幸せを演出し。
ある時は、仲間と喜びを、分かち合う。

こんなすばらしいこと、他にはなかなかありません。
言い方は違っても、「乾杯」という文化が、世界中にある理由が、わかりますね。

「乾杯」には、他人同士を「仲間」にしてしまう、不思議な力がある。
そして、「人の幸せ」は、すべて「人」が、運んできてくれるもの。

この「人は、乾杯の数だけ、幸せになれる」という言葉。
実に理にかなった、言葉なのです。
あなたの隣人と、人生に乾杯！



達成した目標を楽しもう 1098



東南アジアに、次のような昔話があります。

ある沼で暮らす1匹のカメが、神様に「ウサギのように、早く走りたい」とお願いしました。

神様は、カメの姿をウサギに、変えてくれました。

ウサギになったカメは、間もなくして「トラのように、強くなりたい」と再びお願いしました。

神様は、その願いも叶えてくれました。

ところが、トラに変身できても、カメは飽き足らなくなり、今度は「鳥のように、空を飛びたい」とお願いしたのです。

しかし、神様は「わがままな奴だ」とお怒りになって、カメを元の姿に、戻してしまったのです。

この話は、「欲望は、キリがない。1つの望みを叶えることができても、すぐに飽き足らなくなる」という観点から、多くを望むことの愚かさを、教え示しています。

1つの願望を叶えたら、ワンランク上の願望を目指すことは、決して悪いことではありません。

しかし、まずは1つの願望が、叶ったことに感謝することです。

そして、そうなれた喜びにひとり、その境遇を存分に、楽しむことです。

この物語に登場するカメでいえば、ウサギになれたことに感謝し、「早く走れる生活」を満喫するのです。

そうすれば、感謝と喜びの念が、心の中に満ちあふれるようになります。

心が、明るく豊かになります。

次の願望を目指すのは、それからでも遅くはないのです。



災いが絶好の機会に 1099



お釈迦様にまつわる、こんなエピソードがあります。

あるとき、1人の男がお釈迦様に、こんな相談を持ちかけてきました。
「私は20年以上も、奉公先で働いてきましたが、先日、奉公先をクビになってしましました。この先、どうすれば、いいのでしょうか」

すると、お釈迦様は民家の軒先に吊してある鳥籠（とりかご）を指しながら、次のように言いました。

「あの鳥籠の中にいる鳥は、いつも飼い主から、エサを惠んでもらえるから、食べるには困らない。

でも、もし、あの鳥が鳥籠から出ることができたら、エサには不自由するかもしれないが、新たな天地に向けて、飛び立つことができる。

今のあなたは、自分という鳥が、鳥籠から出て、新天地に向けて飛び立ったところだ。
そう思えばいい」

私たちも同じです。

もし、リストラに遭い、職を失ったとしたら、それは脱サラ・独立を果たす、絶好の機会を得た、可能性があるのです。

やりたかった仕事、すなわち天職を通して、世の中に貢献するチャンスかもしれないのです。

ですから、「世の中には、福も災いもない」と言い聞かせ、希望に満ちた明るい未来のみを思い描くことが、大切になってきます。

そうすれば、人生は、徐々に、自分の思い描いた通りに、展開するようになります。
災いが、絶好の機会になるのです。



幸福は身近に存在する 1100



2010年に、南米チリの鉱山で、落盤事故が起きました。
33人の作業員が、地下700メートルの避難所に、閉じ込められたのです。
69日ぶりに全員が、無事救出されたとき、世界中は歓喜にわきました。

作業員たちが、救出された直後、テレビ局のレポーターが「今、1番したいことは、何ですか」と質問したところ、彼らの多くは、次のように答えました。

「家族といっしょに、食事がしたい」「最愛の家族と、ゆっくりと過ごしたい」「家に帰つて、シャワーを浴びたい」などなどです。

いずれも、無事に戻れたという幸福を、しみじみ体感するために、望んだことでした。
そして、言うまでもなく、これらは日ごろ、私たちがいつも体験していることでもあります。

私たちは、本来幸せなのです。

ただ、そのことを忘れているだけで、気づこうとしないだけなのです。

ですから、それを知るためには、もし、自分がチリの落盤事故に遭った、作業員たちと同じような状況に立たされたとき、1番に何を望むかを、考えてみることです。
きっと、同じように、「家族といっしょに、御飯が食べたい」「熱いお風呂に、つかりたい」といったコメントを、口にすると思います。

幸福は、遠いどこかにあるのではなく、身近に存在するのです。
意識するしないにかかわらず、私たちは、その恵みの中で、生きているのです。

いつもこのことを、気にとめておくと、いつも幸せを、感じることができます。
幸福は、あなたの身近に、存在するのです。



